



明治中期の山手外国人墓地 当館蔵古写真

開港のひろば

YOKOHAMA ARCHIVES OF HISTORY NEWS

編集・発行／横浜開港資料館（財横浜開港資料普及協会）
横浜市中区日本大通3番地 〒231 電話(045)201-2100
発行日／平成6年8月3日
印 刷／株式会社 佐藤印刷所

「山手外国人墓地に眠る人びと」に寄せて

港と市街を見下ろす山手の丘にある外国人墓地は、多くの人がびとが訪れる横浜の名所の一つとなっている。この墓地の起源は、開国以来の横浜の歴史とともに古い。一八五四年（嘉永七）三月六日、日米和親条約の締結交渉に備え、横浜沖に停泊していた軍艦ミシシッピ号上、ロバート・ウイリアムスという陸戦隊員が死亡した。そのため埋葬地の選定が日米協議の最初の議題となつた。話し合いの結果、増徳院の境内に土地が提供されることになり、九日に日米合同で葬儀が行なわれた。『ペリー提督日本遠征記』には、その土地について、「横浜村から少し離れたとある丘の麓の、非常に美しい場所」と記されている。死者の哀悼という人類共通の感情を生起することによって、その死は日米和親の礎となつた。

その後下田の玉泉寺に外国人用の墓地が設けられることになり、改葬されるが、横浜外国人墓地成立の端緒をなす出来事であつた。

一八五九年（安政六）八月二十五日 横浜開港後二か月もたたない

外国人居留地を舞台に貿易・商現在被葬者の数は四千五百余、

港と市街を見下ろす山手の丘にある外国人墓地は、多くの人がびとが訪れる横浜の名所の一つとなっている。この墓地の起源は、開国以来の横浜の歴史とともに古い。一八五四年（嘉永七）三月六日、日米和親条約の締結交渉に備え、横浜沖に停泊していた軍艦ミシシッピ号上、ロバート・ウイリアムスという陸戦隊員が死亡した。そのため埋葬地の選定が日米協議の最初の議題となつた。話し合いの結果、増徳院の境内に土地が提供されることになり、九日に日米合同で葬儀が行なわれた。『ペリー提督日本遠征記』には、その土地について、「横浜村から少し離れたとある丘の麓の、非常に美しい場所」と記されている。死者の哀悼という人類共通の感情を生起することによって、その死は日米和親の礎となつた。

その後下田の玉泉寺に外国人用の墓地が設けられることになり、改葬されるが、横浜外国人墓地成立の端緒をなす出来事であつた。

一八五九年（安政六）八月二十五日 横浜開港後二か月もたたない

外国人居留地を舞台に貿易・商現在被葬者の数は四千五百余、

業に活躍した商人達を中心に、日本の近代化のために学問や技術を伝えた御雇外国人、キリスト教の布教や教育に生涯を捧げた宣教師、横浜開港貿易を支えた船員など、それぞれが時代相を背負いつつ永遠の眠りについている。この墓地も震災や戦災によつて物心両面にわたる大きな被害を受けたが、役員や管理人

墓標は失われたが、台座は現在

も原形をとどめている。これが

最も古の被葬者である。その後も

毎年のように外国人殺傷事件が

起き、居留民や寄港船舶の乗組

員の死者もあつて、被葬者が増

えていた。そのため一八六一年（文久二）に外国人専用の墓

域が定められた。こうした経緯

からすれば、この墓地は悲劇の

産物に他ならないが、そうだからこそ国際親善の願いがこめら

れているともいえる。数次の拡

張にともない、その都度幕府が

造成費用を負担しながら、一八

六六年（慶應二）には無償貸与

の方針を決定し、明治政府もそ

れを継承したのはその証しだ

る。その伝統は今も受け継がれ

ている。一八七〇年（明治三）

〇日まで、財團法人横浜外国人

墓地との共催により、企画展示

として、八月三日から一〇月三

〇日まで、財團法人

企画展示「山手外国人墓地に眠る人びと」

出陳資料から

ロシア将兵葬列の図（図版①）

三井文庫の所蔵する「水書」に含まれている。この資料には三井横浜店から本店に送られた書簡の写しが綴られており、これは安政六年（一八五九）八月十五日付書簡の付図である。この年七月二七日、ムラヴィヨフの率いるロシア使節団の随員、モフエトとソコロフが何者かに殺害された。八月五日に葬儀が行なわれたが、その葬列の模様を描いたものである。この時の光景を描いた図は他に例が無く、貴重である。警固の日本役人を先頭に、白衣のロシア艦隊員、「アメリカ僧」の後に棺が続き、さらに領事団、軍楽隊、銃隊などがこれに従っている。書簡本文には、「見物人大群集」の中、埋葬地に到着するや、五度にわたって銃隊が空に向けて発砲、これに呼応して停泊中の艦隊からも空砲を打った様子が記されている。このロシア将兵の埋葬が外国人墓地成立の直接の端緒となつた。

最初の墓域図（図版②）

外国人殺傷事件と被害者の埋葬に関する幕府と外国代表との協議の経過は、正統「通信全覽」にまとめられており、その付図から墓域の成立の経過を知ることができる。また、「通信全覽」がある。

編集のもととなつた資料は、「外務省引継書類」として、東京大学史料編纂所に収藏されている。したがつて、その付図の方が「通信全覽」のそれよりもオリジナルに近いと考えられる。今回の中からは、その中から「外国人埋葬雑件」の付図「横浜町増徳院最寄地所龜絵図」と「在横浜李國人墓地ニ於テ邦人暴行一件」に含まれる図を複数して展示する。

前者はロシア将兵の墓標を建設するにあたり、仮埋葬地とされた増徳院境内の一画では手狭なため、隣接の宇宮之脇と呼ばれる畠地を買収することになるが、その際に作成されたもの。したがつて安政六年末頃の様子である。この地域を描いた絵図として最古のものであり、その意味でも興味深い。

後者は「続通信全覽」中の「英岡士横浜麦畝水夫安埋一件」の付図と同様なもので、成立当初の墓域に関する基本的な絵図であったらしい。増徳院に隣接して柵矢来で囲われているのが、文久元年（一八六二）七月頃、この地区内の日本人墓地を移転して設けられた最初の外国人専用の墓域、入口近く左に描かれているのがロシア将兵の墓標、右が万延元年（一八六〇）に殺害された二人のオランダ人船長の墓標である。

横浜外国人墓地規則書

神奈川奉行の委任により元町名主が管理に携わっていたらしい。明治二年（一八六九）九月、管理運営を全面的に領事團に委ねることになり、領事団はこれを受けて、翌年居留民の代表からなる委員会（The Committee of the Yokohama General Cemetery）に管理権を委譲した。一八七一年（明治四）一月の日付をもつこの資料は、委員会が制定した最初の規則である。原題は Rules and

Regulations of the Yokohama General Cemetery、原本は英國立公文書館所蔵する英國外務省文書（FO46/144）に含まれている。本展示では、財团法人横浜外国人墓地を通じて、英國立公文書館から提供を受けた写真をもとに、複数を作成して出品する。

外務省記録 横浜外国人墓地一件

明治期に入つてからの外国人墓地をめぐる外交交渉に関する基本的な資料

であり、外務省外交史料館に収藏されている。「横浜港外国人墓地之件」「根岸村字大尻於テ清国人墓地貸渡ノ件」

めぐる外交交渉に関する基本的な資料

であり、「外務省記録 横浜外国人墓地一件」には、「外務省記録」にはこの他に、横浜の外国人墓地に関連のある資料として、「外国人墓地関係雑件」「外国人埋葬雑件」と題される簿冊もある。

第一次大戦戦没者記念門除幕式写真
(図版③)

第一次世界大戦後、東京・横浜から出征した連合軍兵士の戦没者の慰靈のため、外国人墓地の山手本通り側の一角に記念門が建設され、大正二年（一九二二）四月二二日、来日中のイギリス皇太子ウェーラズ公を招いて除幕式が行なわれた。その模様を撮影した写真で、トマス・クラマタ氏所蔵の写真帳から複写させていただいた。

「内外の参列者数千名」と当時の新聞は伝えている。翌年に起きた関東大震災のため、記念門も被害を受けるが、銘板は被災をまぬがれた。現在は正門の内側に移されている。また、この写真に写っている鉄扉も修復して使用されていたが、第二次大戦中供出させられてしまった。

外国人墓地地券回復申請書

墓地委員会が、英國總領事を通じて、

関東大震災で失われた地券の回復を神奈川県に申請し、墓地の敷地が震災後

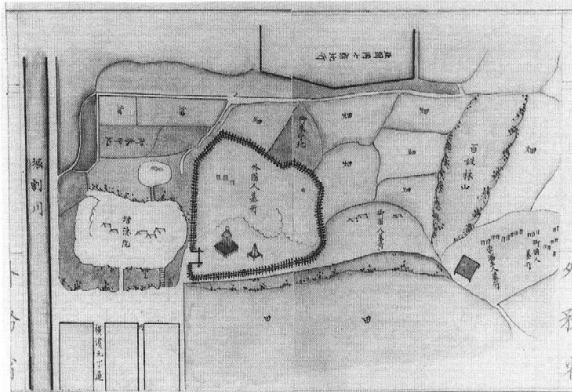
国有雜種財産とされたため、県知事が所管の東京税務監督局長に取り次いだ際の文書である。神奈川県立公文書館に収藏される「県庁各課文書 総務部 知事官房外務係」に含まれている。外

国人墓地のよう、一定の目的・用途のために貸与される特別貸渡地には、普通の地券ではなく、特別貸渡券の交付されるのが普通だが、墓地にはそれが無かつたと考えられている。しかし、この文書によつて、慶応二年（一八六〇）末に締結された「横浜居留地改造及競馬場墓地等約書」に基づいて、券証の発給されていたことが判明する。ただし、回復申請にもかかわらず、新規の券証は発行されなかつたようである。現在墓地の敷地の権利関係がいまになつてゐるのは、このあたりに理由があるのではないか。

横浜外国人墓地受付簿

関東大震災の結果、墓地の基本台帳である受付簿も失われてしまつた。現在使用されているのは、震災後のものである。戦後英國領事館と管理人の安藤寅三氏の努力で、失われた台帳の復元が試みられ、墓地原簿が作成されたが、復元率は四〇%弱と考えられる。ところが、失われたと思われていた受付簿の一冊が、米国大使館で難を逃れて保存されていたのが発見され、墓地に返却された。一八八三年一月から一八九〇年二月まで、受付番号九五一番から一二九二番までのものである。これによつて、失われたのは一冊目と三冊目、現在使用されているのが四冊目にあたることが判明した。明治期の墓地の運営の実態と居留地社会の一面を知ることのできる貴重な資料である。

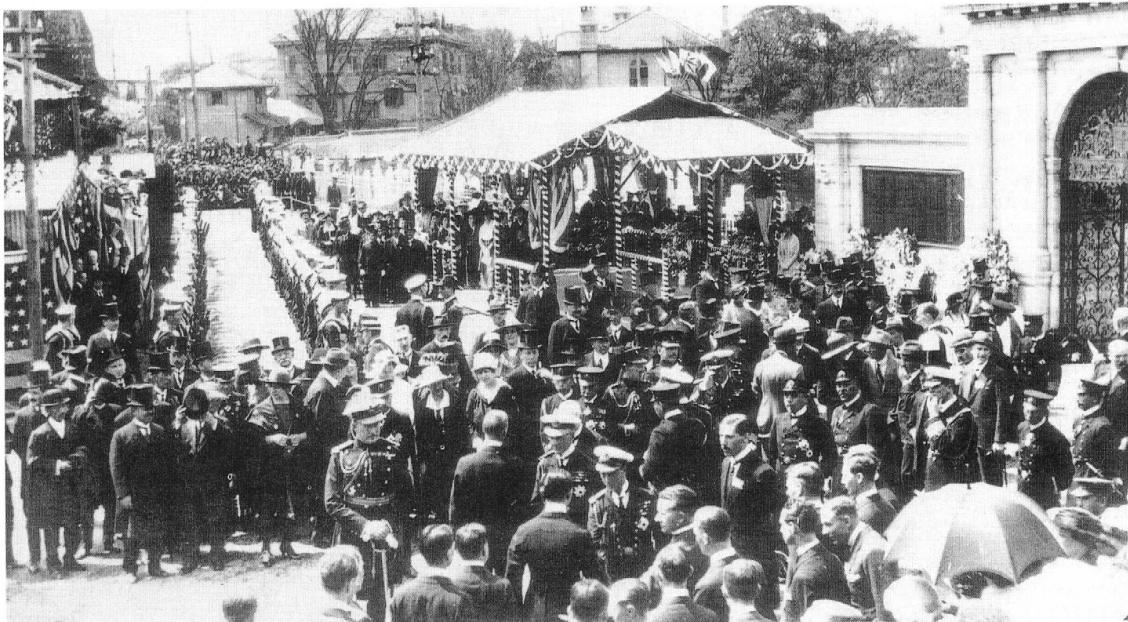
（斎藤多喜夫）



図版② 最初の墓域 外務省引継書類『在横浜李国人墓地ニ於本邦人暴行一件』付図 東京大学史料編纂所蔵



図版① ロシア将兵葬列の図 (財)三井文庫蔵「永書」付図



図版③ 第一次大戦戦没者記念門除幕式 トマス・クラマタ氏所蔵写真帳より

山手外国人墓地に眠る人びと

1. ヨコハマ・アンダーテイカー

アンダーテイカー

山手外国人墓地を一巡してみると、様々な墓標にもいくつかの定型のある

ことがわかる。おそらく、そう多くはない墓標業者の存在が予想され、そこには標準的な墓標の型錄が用意されて

いたのではなろうか。というわけで

山手外国人墓地をめぐる弔師たち――

ヨコハマ・アンダーテイカーの話。

業種柄派手な宣伝はひかれられるこ

とであろうから正確な情報を把握する

のは困難ではあるが、管見する限りに

おいて、最初に横浜外国人居留地の新

聞に葬祭業の広告を掲載したのは、船

大工の草分け的存在であるフライ

(H.J.Frey) である(図①)。堀川沿

いクリークサイドの一一番(現かな

がわ社会保険センター所在地)から一

二八番へ移転した際の一八六七年四月

二日付の広告に、「棺製作、葬儀執行、

H. J. FREY & Co
Coffin makers and Undertakers.
Funerals Performed.
A Hearse with one or two horses
if required.

Lot No. 128,
Next to the Berlin Hotel.
Yokohama, 2nd April, 1867.

図① The Daily Japan Herald,
1867. 4. 2



図② The Japan Gazette,
1876. 4. 10

GEO. BUTLAND,
Funeral Undertaker
and Stone-Mason.

ALL REQUISITES FOR FUNERALS ON
MOST REASONABLE TERMS.

MONUMENTAL STATUARY
in Marble, Granite,
and all descriptions of Stonework for
Memorials neatly executed to order.

A Selection of Tombstones, Iron
Railings, &c., always on hand.

N.O. 119,
OPPOSITE EUREKA HOTEL.
Yokohama, Sept. 2nd, 1878.

図③ The Japan Gazette,
1878. 9. 2

NOTICE.

THE YOKOHAMA UNDERTAKING CO.,
114, Creek-Side Street.

A RE prepared to take orders for FUNERAL RAILS in YOKOHAMA and TOKIO. Orders placed in the LETTER Box at the above Number, will be promptly attended to.

W. T. JARMAIN, Manager.
Yokohama, Oct. 16th, 1886.

図④ The Japan Gazette,
1886. 10. 16

馬車用意」とある。葬儀社の系譜として、大工→棺製作→葬儀社というケーブルが考えられるであろう。もうひとつ

の系譜が、石工→墓標設置→葬儀社である。その後者の典型がラウヘンバーグやスチボルトになる。

創始者のフライが、一八六八年、開

港間もない神戸に転じた後、入れかわ

りのように来浜し、ウイルキー

(J.D.Wilkie) と組んで造船・建築業を

始めたラウヘンバーグ (Leonard Lauferberg) が一八六九年七月クリークサイド一一番で葬祭業を兼営する。

ウイルキー・ラウヘンバーグ商会は、

七二年頃パートナー・シップを解消した

が、そこから独立したマイトンとワト

ソン (Mighton & Watson) が一〇七番

ルト商会を継承するが、七八年七月一

九日パートナー・シップは解消され、ス

チボルト商会は夫人が継続し、バトラー

(George D.Butland) と組んでスチボ

ルト商会を継承するが、七八年七月一

九日パートナー・シップは解消され、ス

ムが継承していく。そして、ボームと競いあつたのがスチボルトである。

スチボルト (Nicolai Stibolt) は、

上海→長崎→横浜を渡り歩いたデン

マーク人のビルダーであるが、横浜に

転じた(七四年)当初はアーキテクト

兼営広告をだした最初は七六年一月三

日付で、一月一七日付の広告では「新

しい靈柩車が到着した」と記し、その

後は靈柩車の図入広告としている(図

②)。スチボルトは翌七七年三月一日

四七歳で死去、葬儀社はスチボルト夫

人 (Johannah Stibolt) がバトラード

(George D.Butland) と組んでスチボ

ルト商会を継承するが、七八年七月一

九日パートナー・シップは解消され、ス

チボルト商会は夫人が継続し、バトラー

(John Robson) が受継ぎ、大震災ま

で営業を続ける。以上がヨコハマ・ア

ンダーテイカーのあらましである。

自らを自らの葬儀社が弔うことにな

なお、バトラードとスチボルト夫人の死去した八六年の一〇月、山手外国人墓地の管理人であるジャーメイン (J.J.Jarmain) の息子である W.T.

ジャーメインが一四番地に「横浜葬儀社」を興している(図④)が、一年

と続かなかつたようである。

続いて一八九六年、八一番にホルゲ

イト (C.Holgate) が葬儀社を開業し、九八年廃業したスチボルト商会の跡を

襲つて二五三番に移り、以降居留地葬

祭業界を独占していく。一九〇一年外

国人墓地に程近い、一般病院前山手本通り八一番地(現在、元町公園内エリ

スマニ邸の建つてゐるあたり)に転じ、

〇七年元一般病院事務長のエリス (Charles Ellis) が、更に一〇年ロブソン

ン (John Robson) が受継ぎ、大震災ま

で営業を続ける。以上がヨコハマ・ア

ンダーテイカーのあらましである。

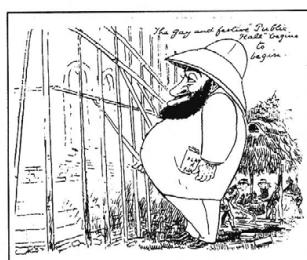
なつた者、すなわち山手外国人墓地に

眠るアンダーテイカーは、ラウヘンバーグ、スチボルト夫妻、バトラード

(堀勇良)

2. フランス人建築家、

ポール・サルダ(父)



「パブリック・ホール建築開始」
(ワーグマン『ジャパン・パンチ』)

サルダ (Paul Pierre Sarda 一八四四年七月二二日、ロワール県生まれ) は、一八七三年に海軍省の御雇い外国人として来日し、横須賀造船所の技術者学校の器械教師を三年程つとめた。続いて文部省の雇いとなり、七七年六月から一二月まで東京大学で教えている。そして七八年頃より横浜居留地に移り住み、長く建築家として活躍し、数多くの建築物を手懸けた。代表的なものに、パブリック・ホール・ゲート座(一八八五年)、グランド・ホテル新館(一八九七年)、指路教会(一九一年)、フランス領事館(一九六年)などがある。また多くの商館や個人住宅、倉庫も建築した。かなりやり手の実業家の面もあり、一財産を成している。そのため、話題にことかかない存在であつたらしく、ワーグマンやビゴーの描く風刺雑誌の格好の題材となつた。

サルダ氏は一九〇二年にフランスへ帰国している。かなり長いこと滞在し、昨年四月一日に日本へもどってきた。それから約一年後に死亡したことになる。フランス滞在中は名医の診察を受け、健康には注意していたにもかかわらず、横浜にもどる際に体重が激減した。かれ自身は調子はずつといいとは言っていたのだが、

サルダ氏はこの居留地の古老として最も知られた人物のひとりであった。建築家であり請負人であったかれが残した建物はいたるところに見られる。



「山手は私そのものだ。」
(ビゴー『ボタン・ド・ヨコ』)

サルダの息子

計報に記されている一人息子、ポール・サルダ(父親と同名)は実は父親と同様にエコールサンントラル(Ecole

四月三日号に掲載されたサルダの死亡を伝える記事は、当時の居留民がとらえたかれの横浜居留地での半生を物語ついて、興味深く思われる所以で、次に紹介することにしよう。

「昨日の八番地に住まうサルダ氏の死亡の報せは、居留地に少なからぬ衝撃を与えた。二週間以上、寝込んではいたが、重態だとと思われていついかつたので、その死は予期しないできごとであった。三月半ば頃に、この季節になると決まってかれを悩ましていた痛風とリューマチに襲われた。痛みは激しさを増し、東京からベルツ博士が、また横浜のレイドハール博士が呼ばれた。二人が最後に診察したのは土曜日であり、かれらの話によると、普通の場合は特段危険なことはない病気であるが、サルダ氏の体格からすると致命的となることもありうることであった。そして日曜日の朝、七時四十五分に突然の死を迎えたのである。

サルダ氏は一九〇二年にフランスへ帰国している。かなり長いこと滞在し、昨年四月一日に日本へもどってきた。それから約一年後に死亡したことになる。フランス滞在中は名医の診察を受け、健康には注意していたにもかかわらず、横浜にもどる際に体重が激減した。かれ自身は調子はずつといいとは言っていたのだが、

サルダ氏はこの居留地の古老として最も知られた人物のひとりであった。建築家であり請負人であったかれが残した建物はいたるところに見られる。

サルダは本日、ローマカトリック教会で執りおこなわれた。多くの会葬者と故人の友人が参列した。フランス正副領事、イタリア領事、D・ベッカー(子供の頃からの故人の友人)、ファブル・ブラントといった人々の顔があった。

多くの花輪もおくられていた。横浜外国人墓地に埋葬された。

故人には日本人女性との間に息子が一人おり、現在フランスでエンジニアの職についている。遺言書はまだ見つかっていないので、故人がその多額の遺産分配をおこなったのかどうかは不明である。」

ちなみに成績の方であるが、息子は三年間を通じて中の下であった。父親は一二九人中三一番で入学したが、一年終了時には一〇三番にまで落ち、成績不良のため警告が出されている。素行には問題なかったが、三年の卒業時(七三年)まで成績はもどらなかつた。國や時代が違つても、學校時代の成績と社會に出でから活動があまり関係ないことには変わりはないのかもしれない。

父親サルダの墓は一三地区にある。
(中武香奈美)

コンクリート造の地下室を居留地に初めて紹介したのもかれである。かなりの資産家でもあった。また美術品の熱語ついて、興味深く思われる所以で、

学んでいる。同校に二人の成績表が残つていた。

成績表の履歴欄によると、息子は一八七八年五月二八日、東京の駿河台で生まれている。前年に父親の東京大学での御雇いがおわり、横浜へ移つて建築事務所を開く前の頃であったと思われる。父親が三四歳の頃。母親については不明である。エコール・サンントラル入学前にコレージュで学んでいるので、早くから日本の親元を離れてフランスで生活していたと考えられる。父親が死亡した時は二七歳。エコール卒業(一九〇二年)後もそのままフランスに留まり、エンジニアとして一人立ちはじめた頃であろうか。亡くなる前の一九〇二年から一九〇四年にかけて父親が一時フランスへもどっているので遠く離れていた親子はしばしお間、親子水入らずの生活をおくつたのである。

3. ラウダーファミリー

人の世の常として、横浜の外国人社会にも男女の出会いがあり、ロマンスが生まれた。ラウダー夫妻は牧師の子という共通の生い立ちをもち、開港後早い時期に横浜で出会い、結婚し、ここに骨をうめたカップルである。

ラウダー夫人」とジュリア・メリ

ア・ラウダー Julia Maria Lowder は、高名なアメリカ人宣教師 S・R・ブラウンの長女。一八四〇年二月一八日、父の伝道地マカオで生まれた (*Japan Gazette* 1919.8.19)。一家はその後帰国していたが、日本の開港を知ったブラウンは再度伝道におもむく決意をする。

一八五九年（安政六）五月、ブラウン一家はフルベッキ、シモンズの同僚宣教師、フランシス・ホール（ウォルシュー・ホール商会創立者）らと一緒にニューヨークを出航し、香港・上海をへて、一月一日に神奈川に到着した（高谷道男編訳『S・R・ブラウン書簡集』、以下『書簡集』と略称）。

夫人や三人の子供は日本での生活の準備がととのうまで、しばらく上海にとどまっていたが、二月二九日、初雪におおわれた横浜についた (Francis Hall, *Japan through American Eyes*, ed. by F.G.Nothelfer)。ブラウンはペボン夫妻の住む神奈川の成仏寺の庫裏に手をひいて住んでおり、

一家はそこに落ち着き、ジュリアも父とともに日本語の勉強にはげんだ（『書簡集』）。

ジュリアはまもなく一〇歳になろうとしていた。ヘボン夫妻と散歩にでかけたり、ホールのエスコートで遠乗りでかけている。女性の乗馬姿は日本人にはものめずらしく、人びとが家から飛び出し見物人の列ができるたといふ (Hall, 1860.2.15の項)。

一方、ジョン・フレデリック・ラウダー John Frederick Lowder は一八四三年一月一五日生まれのイギリス人。父は上海のイギリス領事館付牧師だったが、赴任して一年後に妻子をのこして海で溺死したという（『書簡集』）。

一八六〇年三月、ラウダーはイギリス外務省領事部門の日本語通訳生の試験を受けたが失敗（外務省はこの年から試験制度を採用。萩原延寿『遠い崖』参照）。しかし再試験を懇請して許され、六月四日付けで採用された。そして翌七月の船で日本に発つよう指示された (FO46/9)。弱冠一七歳であつた。

日本に赴任したものの政情は必ずしも平穏ではない。一八六一年（文久元）七月五日には江戸高輪東洋寺のイギリス公使館が襲撃され、ラウダーもピストルで応戦しなければならなかつた（オールコック『大君の都』下巻）。

横浜では初期には宣教師の自宅で日曜の礼拝がおこなわれた。古手の住人ロジャースの回想によれば、ブラウンの家で礼拝があったときには、長女

ジュリアがオルガンを奏しており、長身のラウダー青年の姿をよく見かけた（『書簡集』）。

当初から横浜は圧倒的に男性社会だった。一八六〇年代の終わりまでは女性の数は両手で数えられるほどだけだつたから（『ジャパン・ガゼット 横浜五〇年史』）、妙齢のジュリアの存在は一際目立つたことだろう。

一八六二年（文久二）九月、ラウダーより一年後輩の通訳生アーネスト・サトウが横浜に着いた。サトウはさつそく成仏寺にブラウンを訪問したが、そこで結婚のため住地の函館領事館から戻ってきていたラウダーに出会っている (Satow Diaries, PRO30/33/15/1)。神奈川領事館の結婚登録簿（写し）には、ふたりが九月二三日、

ヴァイス英領事とベイリー牧師によつて領事館で結婚したことが記されている。花婿は一九歳、花嫁は二三歳の若さであった (FO262/63)。その翌日に花婿事件が勃発、居留地は騒然となつた。新婚夫婦はどうしたのだろうか、動静はよくわからない。ちなみに、

二か月ほどの七月八日にはラウダーの母が、当時賜暇で帰國中であった駐日公使オールコックと再婚している。ラウダーはその後長崎の領事館に数年間勤務。一八六四年（元治元）の四国連合艦隊の下関砲撃のときには通訳官として長崎から派遣されている。その後兵庫・大阪副領事、新潟代理領事を歴任。新潟では義父ブラウンを新潟英学校に招聘するのに尽力しており、

ブラウンが一八六九年（明治二）八月再度来日して横浜に着いたときには、横浜領事に昇任していて義父を驚かせている（『書簡集』）。

一八七〇年（明治三）、日本勤務も一〇年目に入ったラウダーは本国で法廷弁護士の学位をとるため賜暇を願いで（FO362/200）、七月二二日に妻と息子、義妹ハティ・ブラウンとともに横浜を出航した (JWM 1870.7.23)。

一家は二年後の一八七二年（明治五）七月横浜にもどつたが、ラウダーは帰任しなかつた。頂点にのぼりつめても総領事どまりの領事部門勤務に見切りをつけたということであろうか、ラウ

ダーは一八八八年（明治二）まで明治政府雇用となり、おもに横浜税関の法律顧問として重用された。

一八八九年（明治二）からはもうばら法廷弁護士として活躍。横浜居留地の話題をさらつたカリュー毒殺事件の裁判の弁護人もつとめた。居留地の名士であり、条約改正の外国人の急先鋒でもあつた。一九〇二年（明治三五）一月二七日長年住みなれた山手二〇三番の自宅で死去した。その後数年、夫人の消息は漠としているが、一九〇四年頃には山手にもどり、一九〇七年頃からは逗子に隠居（ディレクトリ）。横須賀の基督教會で海軍士官らの布教にあたつていたという。一九一九年八月一八日、七九歳で死去。山手の外国人墓地に夫とともに眠る。

横浜人物小誌

『横貿』社長、代議士

36

三
宅

磐

遙かに横浜港を望む三ツ沢墓地の高台に、三宅磐の墓がある。磐、正しくはイワオだが、親しみを込めて「バン」と呼ばれたようだ。墓誌には「当初「盤」と刻んだ跡が残る。

在の岡山市に三宅保之、ブルース夫妻の次男に生まれた。保之は、安部磯雄と日本組合教会岡山教会を創立した一員。兄の荒樹は、のち同志社を卒業、大阪天満教会牧師となる。この敬虔なキリスト教徒の家庭環境が、彼の生涯を貫く高潔な人格と生活倫理を育んだ。市街地東部に小高い操（みさお）山がおり、三宅はのちに操生・操山生など

クリスト教徒の家庭環境が、彼の生涯倫理を育んだと見て貰いたい。市街地東部に小高い操（みさお）山が有り、三宅はのちに操生・操山生などと名前が、自分の小柄な体躯と高い志にぴったりだったのだろう。一五二九年九月岡山師範学校附属小学校に入學し、二五年京都府立尋常中学校（のち府立

三宅和夫氏提供

題で演壇に登つたようだ。一方、新聞記

擁護、市民本位の県市政、都市生活基

た二宅磐である。

(佐藤
孝)

(一中) 第二学年に総力戦二八九全教科書問題にからみ校長排斥の同盟罷校を最後まで続けて退学、上京し、九月私立錦城中学校に転校、翌二九年東京専門学校（のち早稲田大学）に入学、二年九月英語政治科を卒業、同窓に後の社会主義者西川光次郎らがいる。同校での学生生活は余り明らかでないが、卒業年の『早稲田学報』三〇・三三号に処女論文「我国の労働問題」が掲載されている。論文は、労働問題の起源から説きこし、やがてわが国でも深刻な社会問題となることに警鐘を鳴らし、その対策として、国家社会主義的政策の採用と職工組合の組織化について論じたものだ。

華堂)、四一年『都市の研究』(A5判二六七頁、実業之日本社)を著し、わが国の都市研究史に先駆的業績を残した。しかし、学生活への志は、四〇年秋、中村房次郎・大浜忠三郎・渡辺文七らの意向を受けた島田三郎の突然の訪問によって断たれる。旧態の商業貿易都市からの脱却、横浜の新しい繁栄策を模索する若手実業家のリーダーたちが、その理論的指導者を求めていたのである。彼らの熱意に感じたか、後年、三宅は未知の都市横浜を「或る意味の実験室と心得」速かに横浜行を決めた、と回想している。四一年一月横浜市政顧問に就任、翌月横浜市青木

全盛時代を築いた。

大正七年市会議員、一三年県会議員、ついで昭和二年九月、衆議院議員補欠選挙に民政党から立候補、初当選した翌三年初の普通選挙による総選挙ではトップを競い、当選四回を重ねるなか民政党の重鎮としての地位を築き、初代の同党横浜支部長に推された。市会では政友の赤尾彦作とのコンビで協調市政を維持し、国会では、島田三郎の衣鉢をつぐ政治家として公娼廃止や渋谷・生糸問題で活躍した。

新聞社主と政治家の二足の草鞋が、三宅の症体を蝕んだのかも知れない。胃酸过多症から病勢が進み、昭和一〇年

年五月には横浜市設備調査委員会の嘱託となり、横浜の港湾・陸上・衛生等都市設備について調査、立案した。

五月三日 六〇年の人生を閉じた。二五日紅葉坂教会平賀牧師により家庭葬が営まれ、翌二六日告別式が弁天橋際の横浜貿易新報社隣広場で社葬とて行なつた。そこへ四月号で記述

三三年一一月大阪朝日新聞社に入社。経済部記者となる。この大阪時代、三宅は、関西の草創期労働運動や社会主義運動で重要な役割りを果す。三四四年八月、関西労働組合期成会の結成に参加して常置員となり、安部磯雄や片山潜らと共に特別賛成会員であった。ついで三六年一月の片山ら社会主義協会に

町（神奈川区）に居を移した。翌四
年五月には横浜市設備調査委員会の嘱
託となり、横浜の港湾・陸上・衛生等
都市設備について調査、立案した。

五月三日　六〇年の人生を閉じた
二五日紅葉坂教会平賀牧師により家庭
葬が當され、翌二六日告別式が弁天橋
際の横浜貿易新報社隣広場で社葬とし
て行われた。年来の友中村房次郎が葬
儀委員長を務め、会場には会衆六千の
涙交じりの横浜市歌が流れた。自らをも
横浜人とし、心身すべてを横浜と市民

者として、鶴原市政下でのガス会社との報償契約や電車市営問題などを論じ、生きた教材によって都市問題・都市政策への認識を深めることになる。

盤の整備から教育、思想など多岐にわたる問題について健筆を振るつた。また、開港記念バザーや女学生による家庭慰問など慈善事業、スチソン女史の

閲覧室から



資料館だより

▼展示

- (1) 「横浜居留地の遺産——山手外国人墓地に眠る人びと」展 8／3～10
／30 山手の外国人墓地の歴史とそこに眠る人々の事績をとおし、横浜の外国人社会を紹介。
- (2) 「横浜中華街の歩み」展 11／2～平成7年1／29 居留地最大の人口を擁し、特色のある市街を形成した

▼講座

- 横浜華僑の事績を紹介し、幕末から大正期頃までの中華街の歩みをたどる。
- (3) 「館蔵資料展・横浜の近代——PART II」 平成7年2／上旬～4／下旬 開港前から明治・大正期にいたる横浜の歴史を、当館所蔵のその時々の姿を表現する特徴的な資料によって跡づけ、紹介する。

▼講座

- 横浜居留地の遺産——山手外国人墓地に眠る人びと」展 10／8、15、22、29 いずれも土曜日で午後二時から（二時三〇分開場、二時開講）

▼寄贈資料

- (1) 大正三年度戸塚小学校高等科卒業生集合写真ほか 四点（戸塚区矢部町 松本喜美子氏）

▼寄託資料

- (2) 武鑑 二点（神奈川区西神奈川講順） 斎藤多喜夫（横浜開港資料館調査研究員）「横浜外国人墓地の成立」、

- (3) 土地宝典 横浜市街全図（明治

当館では、原資料の収集が不可能な場合、資料を撮影し、複製を作成しています。また、それとは別に原資料が当館所蔵の場合でも、明治・大正期、それ以前に作成された資料や状態が著しく悪いものを、保存のために複製化しています。今回は、それらのうち、明治・大正期に横浜で発行された雑誌の複製を紹介したいと思います。閲覧請求でご覧になれ、複写もできます。

『実用藝術新報』（千草園雑誌社発行） 明治二三年二月創刊。『神奈川県統計書』によれば、『奇術新報』は月二回発行で、発行部数は明治二四年が一

月、一二三号（明治二五年一月）を所蔵している。内容は、必ずしも実用とは言え品との批評、毎月開かれる品評会の第一回から第一五回までの作品名と成績、会則、名簿等で構成されている。会則には毎年一回会報を発行するとあるが、管見の限りでは、二輯以降はまだ見つかっていない。また、横浜通信社長の日比野重郎が副会頭として名簿にのり、著作兼発行者にもなっている。

月、一二三号（明治二五年一月）を所蔵している。内容は、必ずしも実用とは言え品との批評、毎月開かれる品評会の第一回から第一五回までの作品名と成績、会則、名簿等で構成されている。会則には毎年一回会報を発行するとあるが、管見の限りでは、二輯以降はまだ見つかっていない。また、横浜通信社長の日比野重郎が副会頭として名簿にのり、著作兼発行者にもなっている。

月、一二三号（明治二五年一月）を所蔵している。内容は、必ずしも実用とは言え品との批評、毎月開かれる品評会の第一回から第一五回までの作品名と成績、会則、名簿等で構成されている。会則には毎年一回会報を発行するとあるが、管見の限りでは、二輯以降はまだ見つかっていない。また、横浜通信社長の日比野重郎が副会頭として名簿にのり、著作兼発行者にもなっている。

月、一二三号（明治二五年一月）を所蔵している。内容は、必ずしも実用とは言え品との批評、毎月開かれる品評会の第一回から第一五回までの作品名と成績、会則、名簿等で構成されている。会則には毎年一回会報を発行するとあるが、管見の限りでは、二輯以降はまだ見つかっていない。また、横浜通信社長の日比野重郎が副会頭として名簿にのり、著作兼発行者にもなっている。

月、一二三号（明治二五年一月）を所蔵している。内容は、必ずしも実用とは言え品との批評、毎月開かれる品評会の第一回から第一五回までの作品名と成績、会則、名簿等で構成されている。会則には毎年一回会報を発行するとあるが、管見の限りでは、二輯以降はまだ見つかっていない。また、横浜通信社長の日比野重郎が副会頭として名簿にのり、著作兼発行者にもなっている。

お知らせ

当館では、従来当館独自の分類法（以下旧分類法）により図書を整理・分類してきましたが、平成6年度より図書分類法を変更し、日本十進分類法（新訂八版以下NDC）により図書分類を行なうことになりました。平成6年度以降受け入れた図書は、全てNDCにより分類されます。また旧分類法により整理された図書も、順次NDCにより再整理する予定です。NDCにより再整理する予定です。NDCへ移行が終了するまでの間、図書の請求番号は、旧分類によるものと、NDCによるものが併存いたします。ご利用に際し、ご不明の点がございましたら、閲覧担当者までお問い合わせください。ご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

月、一二三号（明治二五年一月）を所蔵している。内容は、必ずしも実用とは言え品との批評、毎月開かれる品評会の第一回から第一五回までの作品名と成績、会則、名簿等で構成されている。会則には毎年一回会報を発行するとあるが、管見の限りでは、二輯以降はまだ見つかっていない。また、横浜通信社長の日比野重郎が副会頭として名簿にのり、著作兼発行者にもなっている。

月、一二三号（明治二五年一月）を所蔵している。内容は、必ずしも実用とは言え品との批評、毎月開かれる品評会の第一回から第一五回までの作品名と成績、会則、名簿等で構成されている。会則には毎年一回会報を発行するとあるが、管見の限りでは、二輯以降はまだ見つかっていない。また、横浜通信社長の日比野重郎が副会頭として名簿にのり、著作兼発行者にもなっている。